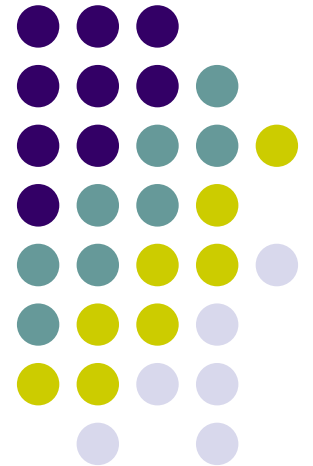


中国西南民族史

8. 唐 - 南詔関係の変質 (9c前半)





再帰唐後の唐 - 南詔国関係

徳宗 - 韋皋 - (東蛮) - 鄭回
李泌 異牟尋 ライン

- 805 徳宗崩御(正月)、韋皋死す(8月)
(李泌は789にすでに死去)
- 同年 順宗退位して憲宗即位
- 憲宗の元和年間(806 ~ 820)
藩鎮抑圧に一定程度の成果



再帰唐後の唐 - 南詔関係

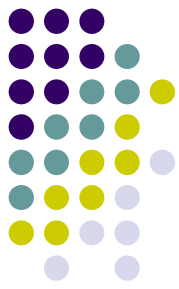
- 808 異牟尋死す・長男尋閣勸が継ぐ(史料8.1)
- 809 尋閣勸死す・長男勸龍盛が継ぐ(史料8.2)
- 816 勸龍盛を「淫逆不道」として
王嵯巔(おうさてん)がクーデタ発動、勸龍盛を
殺し弟勸利盛を立て、実権掌握(史料8.3)

南詔国の再帰唐を実現させた立役者が
相次いで舞台を去る



吐蕃王朝の衰退

- ウイグル - 唐 - 南詔の封鎖政策により吐蕃は国際的に孤立
 - ティソン・デツェン (742 - 797) : 仏教の国教化
- 9世紀には教団指導者が国政の頂点に立つ
- 846 ダルマ王暗殺とともに国中が混乱、王位継承をめぐる王家は南北2朝に分裂、国境の吐蕃軍も互いに争って潰える



長慶の会盟(唐蕃会盟)

- 821-2(長慶元 - 2)
唐 - 吐蕃間に**会盟の成立**

(前後数回にわたっておこなわれた唐蕃会盟の最後のもの。以後は基本的に平和が続く)

唐蕃会盟碑(ラサ・大招寺庭前)



唐蕃会盟碑

(漢文とチベット文が併記されている)





唐蕃会盟実現の余波

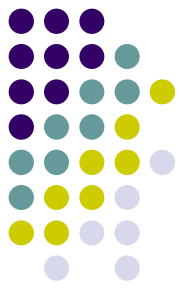
- 820 南詔国、唐に対吐蕃作戦の再開を請う

(史料8.4)

唐側は長慶会盟の準備のさなか
= 当然黙殺される

唐蕃会盟の実現 (史料8.5・6)

= 唐朝が南詔国との同盟関係を重視せざる
をえない状況がなくなる



中国西南における新動向

- 823 勸利盛死す。弟の豊祐(勸豊祐)立つ
「勇敢にして善(よ)く其の衆を用う」(史料8.7)
- 823 中書侍郎・同平章事の杜元穎、
西川節度使となる(史料8.8)

「中書侍郎・同平章事」= 唐後期の宰相の肩書き
西川は韋皋死後の混乱を経て順地化、
エリート官僚の出世コースに組み入れられる



杜元穎治下の西川(成都府)

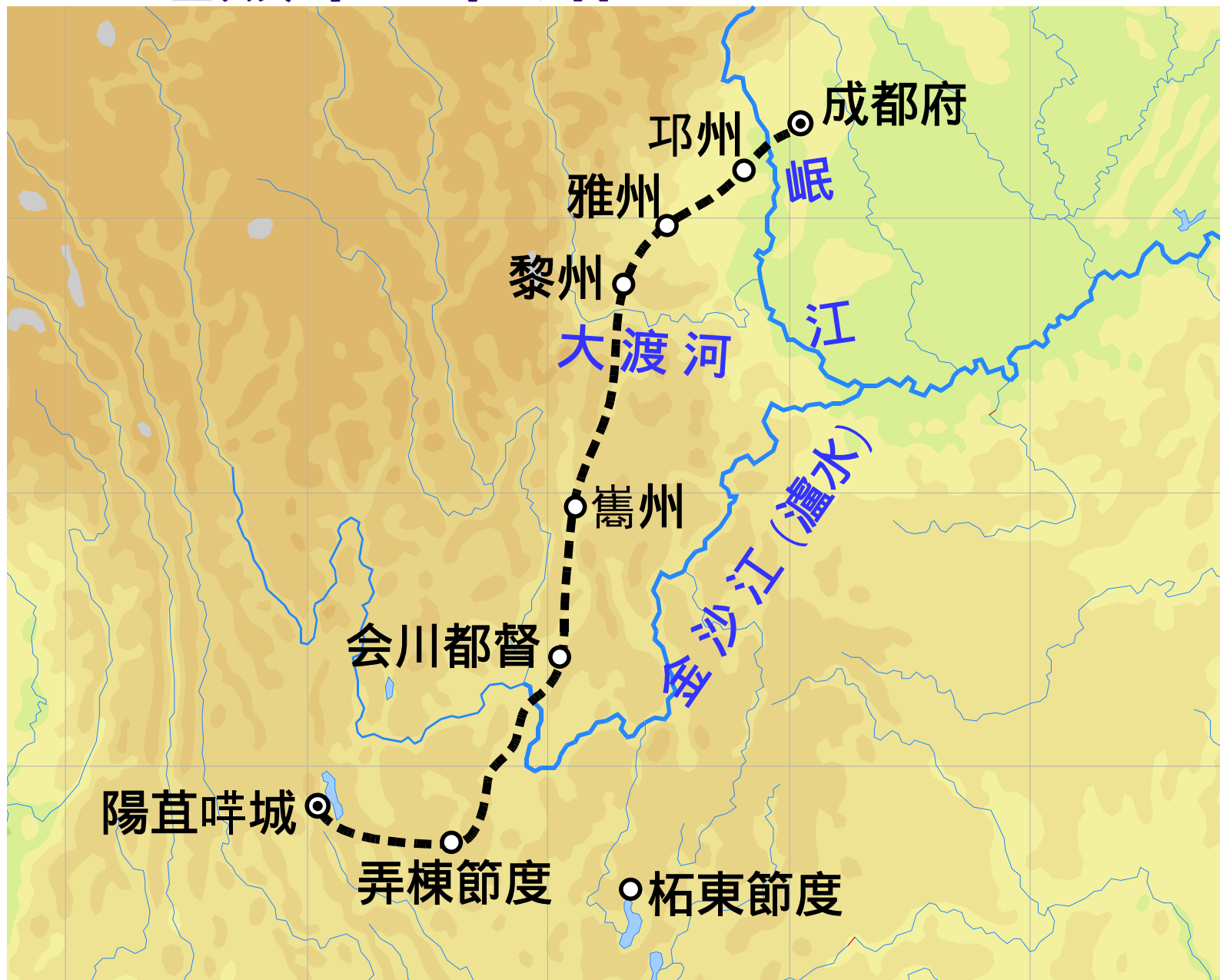
- 元穎：元宰相・文人 / 軍事には不案内
「専ら蓄積に努め、士卒の衣糧を減削す。西南戍邊の卒、衣食足らず、皆蛮境に入りて鈔盜してもって自給す。蛮人かえって衣食をもつてこれに資す。是れより蜀中の虚実動静、蛮皆なこれを知る」(史料8.9)
- 王嵯巔：四川侵攻を計画
「南詔嵯巔より大挙入寇せんことを謀る。辺州しばしばもつて告ぐるも、元穎これを信ぜず」

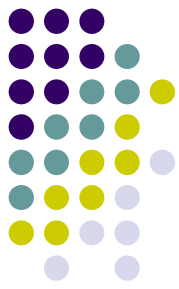


南詔軍の成都侵攻(829)

- 11月 王嵯巔の率いる南詔軍、唐の領域に侵入
「蛮は蜀卒をもって郷導となす」(史料8.9)
= 困窮した辺境の兵が南詔軍を引き込んだ
- 12月 成都城内に進入(史料8.10)
「蛮成都の西郭に留まること十日、其の始めは蜀人を慰撫し、市肆安堵す。将(まさ)に行かんとするに、乃ち大いに子女・百工数万人及び珍貨を掠して去る」
これ以後、南詔国の手工業、大いに発達？

王嵯巔軍の径路



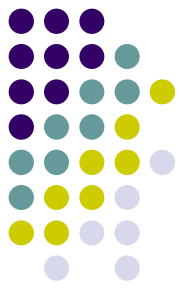


成都侵攻の残したものの

王嵯巔と節度使郭釗の間に和約(相互不可侵)
唐から南詔国(王嵯巔)に国信を賜う(史料8.10)

唐側に雲南対策の重要性を再認識させる
ことには成功

- 王嵯巔の権勢ますます増大？
(唐宋史料にはこの後登場しない
『南詔野史』では豊祐一代の実権を掌握、
世隆即位後に殺される)



成都侵攻の残したもの

830 郭釗にかわって李徳裕が西川節度使に

- 「籌邊楼」を作り、詳細な地図を作製（史料8.11）
「南入南詔、西達吐蕃」
- 辺境に詳しい兵士から情報収集
「未だ月を踰(こ)えずして、皆な身(み)ずから嘗て涉歴するがごとし」

南詔国に対する徹底的な防衛体制を固める



その後の唐 - 南詔国関係

- これ以後も南詔 唐の朝貢は継続する
南詔国にとって唐朝との関係は不可欠
- 円仁の記録: 開成4年(839)正月の朝賀で
南詔国の序列は(日本を抜いて) **諸国の第1位**
(史料8.12)

唐朝にとっての成都の重要性(長安有事の際の
朝廷の避難場所)も考慮すべき？



それでも避けられない待遇低下

- 大中年間(847～859)の末
成都留学生・朝貢使節(随員)の増加
西川節度使杜悰、節減を上申 **裁可される**
(史料7.9/8.13)
- このころ吐蕃王朝は完全に瓦解
= 中国西南における政治・軍事的バランスの
根本的な変動
**軍事的緊張の消失から、唐朝 / 西川節度使が
南詔国を切り捨てはじめた**



唐 - 南詔国関係の破綻

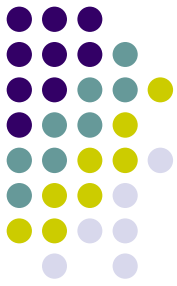
- 859 唐の宣宗崩御 / 同年 豊祐死、世隆継ぐ
 - 弔問にかんする行き違い
 - 世隆の名が玄宗(と太宗)の諱を犯す

(史料8.13)

唐朝は南詔王世隆の冊封を行わない

世隆は自立、皇帝を自称し、元号を建てる

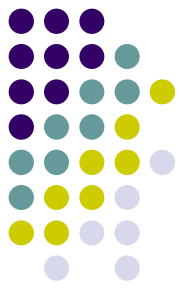
唐朝の秩序からの離脱宣言



再び敵国として

- 859年末 兵を派遣して播州(貴州遵義)を攻める

以後十数年間に渡って戦争状態が続く



新たな対外関係への模索？

- 南詔国の唐の領域以外への軍事遠征

(史料8.14)

832 **驃国** (ひょう / ピュー)

(ミャンマー中部: イラワジ川流域)

835 **彌諾国** (びだく)、**彌臣国** (びしん)

(ミャンマー西部: アラカン州・チンドウィン川流域)

?? **女王国** (ラオス??)

?? **陸真臘・水真臘** (カンボジア)



新たな対外関係への模索？

- いずれも南シナ海・ベンガル湾への出口
- 時期的には**成都侵攻の直後**

この時期にあらためて東南アジア大陸部の陸上交易ルートを広域に把握しようとしている？

= 唐 - 吐蕃関係の終息に際して、そこに自らの新たな存在意義を見いだそうとしている
(ただし、どこまで成功したかは疑問)